
魔法少女リリカルなのは 漆黒の狂剣士

アニヲタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 漆黒の狂剣士

【Nコード】

N6343H

【作者名】

アニヲタ

【あらすじ】

機動六課が解散してから一年、皆それぞれの道を歩き始めていた。だが、束の間の平穏は一つのロストログアによって崩れ始める。

第一話（前書き）

男のオリジナル主人公です
紹介ページは勿論、ありません。
発言などおかしいところはありますが、それは仕様ですので
諦めてくださいね♪

第一話

首都、クラナガン

とつくの昔に零時を過ぎたというのに光り輝き、人々が行き交い動き続ける眠らない街

そんな光の中でも暗い闇があつた。

とある高層ビルの屋上、暗い闇とコンクリートの壁に背を預け体を休める青年が一人。

時折、強く吹く風がその青年の髪を撫でていく。

その髪は白く、長い間手入れをしていないのか少し汚れてしまっていた。

すつ、と静かに青年は瞼を開く。

開かれた瞼から覗くのはまるで血を吸ったかの如く紅い瞳。

静かに目覚めた彼はゆっくりと体を起こし、立ち上がる。

そこからビルの縁まで彼は歩を進める。

目覚めたばかりにもかかわらずその足取りは真っ直ぐで確かだった。

地上の眩い光に彼は一瞬だけ目を細めた。

だが直ぐに慣れたのか下を見下ろし

「相変わらず夜だというのに騒がしいですね」と香気に呟きながら
ビルの縁から宙に足を投げ出し、眩しすぎる地上の明かりを見てい
た。

だが、しばらくして彼も飽きたのかスツクと立ち上がり、遙か上空
を仰ぎ見る。

その視線の先、青白い満月が浮かんでいた。

「いい月夜です。これを肴にしてお酒が飲みたいところですが、用
事もありますし今日はお預けということにしておきましょう」

月から視線を外した彼は唇の端を吊りあげ

そして、

「バルムンク、駆動開始」

その言葉に応えるように彼の右手のグローブの中央に埋め込まれた
黒い宝石が光を放つ。

次の瞬間、現われたのは黒い闇。

それは夜の闇よりもなお黒い純粋な漆黒、その闇は一瞬にして彼を
飲み込み球体となって収束していく。

漆黒の闇が収束したそこには漆黒のコートを纏い、左手には鉄の小
手を嵌め、端正な顔立ちに微笑を浮かべた彼が立っていた。

一般に騎士甲冑、と呼ばれているそれは軽い見た目とは裏腹に物理的にも魔法的にも強力な防御を誇る一種の鎧だ。

「さて、殺戮パーティの始まりです」

そう言うと彼は躊躇いもなくビルの縁を軽く蹴り、地上の光の中に落ちて行った。

彼のように魔法のような力を使い科学ではなしえない様々な現象を起こす者をこの世界、ミッドチルダに住む人々はこう呼ぶ。

―魔導士、と

正に彼もまた魔導士と呼ばれる存在のひとりだった。

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

ショーウィンドーやお洒落な喫茶店が並ぶ大通りの中にあるとある居酒屋で宴会が行われていた。

人数は数十人ほどで、年齢や性別も違う彼らに共通していることは全員が元機動六課の隊員だったことだ。

機動六課、それはロストロギア『レリック』の回収、及び次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが起こしたゆりかご事件の際に活躍した部隊の名だ。

ゆりかご事件が解決した後、機動六課は解散し、皆それぞれ目指す道を歩き始めた。

それから一年・・・

誰が言い出したかは知らないが皆で久しぶりに集まろうということで開催されたのがこの宴会である。

「みんな相変わらずだな」

のんびりとした口調と独特の関西弁で喋るのは栗色の髪の女性だ。

「はやてちゃんも相変わらず元気そうだね」

はやて、と呼ばれた栗色の髪の少女は「なのはちゃんはちょっと痩せたな」

「そんなことないよ」とそのサイドポニーの女性は答える。

「フェイトちゃん仕事が忙しくて遅れてくるって言ってたわ」

栗色の髪の女性は八神はやて、機動六課の元部隊長でロストロギア

の一つ夜天の魔導書の持ち主である。

そして、その隣に座るサイドポニーの女性こそが時空管理局で知らぬものはいないといわれる『エース・オブ・エース』高町なのはある。

その傍ら宴会を楽しむ彼らの様子は様々で

「スバル、あんたガッツギすぎ、もうちょっと落ち着いて食べなさいよ」

「もごもご、もご（そんなことないよ）」

―とガッツギすぎる者もいれば

「エリオ君、大丈夫？」

「うん・・・、ありがとうキャロ」

―無理やり飲まされる者もいれば

「あたしだってなあ、好きで小さいわけじゃねえんだぞ」

「まあ気にするな」

―と犬に慰められる者もいる。

「ヴィータちゃんは別としてエリオはまだ未成年やろ」

「あ、はは・・・」

と苦笑いするなのは

「そういえば最近、はやてちゃんも何か忙しそうだね。なにか事件でもあったの」

なのはのその問いにはやては顔をしかめ

「そうなんよ。事件事態は二年前からあったことなんや」とはやてはそこで話を区切り、懷から一枚の写真を取り出した。

「この写真に写っているのがその事件の重要参考人や」

そこにいたのは黒い騎士甲冑を纏った一人の白髪青年。

そして、その眼は禍々しいほどに紅い。

「管理局が今追っているロストログアがあつてな、その出現現場にこの子が必ずと言っていいほど目撃されてるんよ」

「そのロストログアって一体？」

はやては一泊の間をおき

「第一級指定ロストログア『忘却の都の鍵』その断片や」

とある港の倉庫の中でその食事は行われていた。

―ハイエナ

彼らの食事の状況を限りなく正確に表現するならばそうなるだろう。

彼らの食事にマナーはなくひたすらに喰らうこと

その彼らの傍には似つかわしくない愛らしいクマのぬいぐるみが血に汚れて無造作に転がっている。

倉庫の天井、ガラスの割れた窓から差し込む月明かりに照らし出されたその姿は正に異形。

頭から生えた禍々しい角、過剰に発達した犬歯、そして、血に飢えた獣の目。

正しく鬼と言われる異形だった。

―と、食事に唐突に鬼の一人が何かの気配を感じ、倉庫の入り口を見た。

そこにいたのは一人の青年

「こんばんわ」

黒いコートを着たその青年はまるで知人に挨拶をするかのように言った。

そして、そのまま無防備に歩み寄ってくる。

エサが自分からやってきた。

その事実には鬼達は笑う。

子供の肉も美味しいが、歩み寄ってくる青年の肉のほつが脂が乗っていて美味そうだ。

先走った鬼の一人が青年に襲いかかった。

轟

と唸りを上げて丸太の如き太い腕が振り下ろされる。

血飛沫と肉片が宙に舞う

だが、それは青年のものではなく鬼の腕だった。

思い描いていた未来と違う光景に鬼の思考は停止する。

「遅いですね。その程度ですか、人を捨てて化け物になったというのに、その程度とは。哀れですね」

青年が嘲笑する。

鬼は本能的に自分が見誤ったことに気づく、青年は自分より遙か上の化け物だと。

しかし、それを理解する前に鬼の体は真つ二つに切り裂かれていた。

血煙りが青年の顔を濡らす。

仲間の一人があっさりと目の前で殺されたことに残りの鬼達は青年を警戒、注意深く観察する。

長い白髪と深紅の目、目つきは鋭く力があり、得物も同じく異様。

その得物、片刃の剣の刃渡りは軽々と青年の身の丈を超え二メートルに達しようかという長さで、鏢はなく代わりに何かしらの機構が組み込まれ

ていた。

普通の人間ならば持てぬそれを少年は容易に肩に担いで見せると

「さあ、さあ、さあ！一緒に楽しみましょう。人を捨てた者同士、化け物同士で！」

昂りを抑えぬ声で言う。

残りの鬼が一齐に青年に飛び掛かる。

一人では返り討ちに合うが四人同時ならば誰かが犠牲にはなるだろうが青年を殺して喰らうことができる。

そう考えてのことだった。

一齐に飛び掛かってきた鬼達に慌てることなく青年は剣を下段に構え口を開いた

「カートリッジロード」

応えるように剣に組み込まれた機構が駆動、炸裂音とともに煙をあげてカートリッジを排出

迫る四体の鬼が大きく拳を振り上げる。

その時、青年はニヤリと笑った。

それは狂喜

「ソニックブレード!!」

刹那、叫びとともに剣は解き放たれた。

その刃は一瞬で宙に鮮やかな銀の弧を描いて逆袈裟がけに鬼を叩き斬る。

更に加速した切り返しの斬撃がもう一人を切り裂き、最後に剣から放たれた魔力が黒い風と化して残りの鬼の体を文字通りバラバラに裁断し、血

とともに消し飛ばした。

―と、同時に排出されたばかりのカートリッジが地面に落ち、澄んだ音を立てて転がって行った。

あたりを見回して敵がいなかったことを確認したのか青年は大剣を地面に突き刺して立て体を休める。

「雑魚でしたね」と呟く青年の顔は涼しげな微笑を浮かべている。

その青年が先ほど放ったソニックブレードは古代ベルカ式のなかでもくからある技の一つで習得の難しい技でもある。

にもかかわらず、その涼しげな微笑に集中したあとの疲れは見えない。

スツと気まぐれで視線を向けた先には誰かのものであろう血に濡れたクマのぬいぐるみが転がっていた。

それを拾い上げ、青年は見つめ悔やむような表情をした後、笑みを浮かべる。

それは自嘲の笑み

「化け物にしては優しすぎる・・・か」

その小さな呟きは誰にも聞かれることなく夜の闇に吞まれていった。

第二話

蝉が忙しく鳴く、真夏の午後

道の真ん中で一人の幼い子供が蹲っていた。

その子供は両手で頭を庇い何かに耐えていた。

「痛い」と叫ぶ子供に向かって投げられるのは石だ。

投げつけられる石はどれもが大きめの石で、周りを取り囲む子供達は数十人ほど。

その投げる挙動に容赦という文字はなくぶつけられるたびに傷が増えていく

「この忌み子が!」

「鬼子が!」

そして、浴びせられる罵倒の声

幼く弱い子供は耐え切れずそれに逃げ出そうとしたが

「おっと、ごめんよ」と大人の男に突き飛ばされる。

見上げるとそこには悪意をもった蔑みの嘲笑があった。

「あ・・・あ」

ドス黒い悪意に彼が思わず怯んでいると、襟首を攫まれ再び中央まで引き戻らされ、顔面を殴られた。

蹴る、殴る

殴る、蹴る

腕や足は振り捻られ

何度も髪を掴まれ顔面を地面に叩きつけられ

彼がボロ雑巾になるまでそれは続いた。

そして、いつものように自分をいじめる者がいなくなるのを確認した彼はゴロリと仰向けになって自問する。

白い髪の何がいけなかったのだろう・・・

紅い眼の何がいけなかったのだろう・・・

それとも・・・、

それとも生まれてきたのがいけなかったのだろうか・・・

「・・・母様」
かあさま

—そこで目が覚めた

「久しぶりに見たくないものを見てしまいました・・・」

幼少のころの嫌な思い出に彼、卯月・キョウはベッドの上で顔をしかめた。

疲れ気味ですかね、と自問する。

ここ最近、睡眠時間が確実に削られているせいだろう。

故にこうやって五体の異形を始末して昨日、三日ぶりに拠点に帰ってきてたつぷりと食事と睡眠をとったのだ。

そのおかげで脳もスッキリとしていて清々しい。

「さて、起きるとしましょう」

素早く立ち上がったキョウが最初に向うのは冷蔵庫だ。

開けて、中身を確認

「いけそうですね」

彼にとって食事は戦闘に次ぐ生きる原動力であるため決して妥協などしないのである。

鮮やかな手つきで食材をさばっていく。

数十分後、質素なテーブルにはご飯とみそ汁、胡瓜の漬物が並んでいた。

「いただきます」と両手を合わせ食事を開始。

食事が終ったあとは新聞に目を通す。

「特に変わったことはない、か」

そう呟いて窓の外を見る。

外は快晴でこの様子だと新聞の天気予報どつりになるだろう。

―どうでしょうか

特にコレと言った用事もないし、体を休めるためにも訓練は控えていたほうがいいだろう。

だからと言って寝て過ごすのも無意味すぎる。

と、その時、冷蔵庫の中が寂しくなっていることを思い出したキヨウは再度、窓の外の天気を見て

買い物に行かなければいけませんね、と呟いた。

クラナガンでも三番目に大きいと称されるショッピングモール。

そのショッピングモールの三階にスバルとティアナの二人はいた。

「ティアナ、これも美味しいよ」と大声で自分と呼ぶ元相方にティアナはため息を吐いていた。

本当なら放置しておきたいが、それも可哀想なので

「さっきから食べてばかりじゃない」と言ってやる。

「そうかなあ」

「全くあんたは・・・」

呆れる反面、それが良い意味でのスバルらしさだとティアナは思う。

人というのは変わることより変わらないで続けることの方が難しい生物だ。

目指すものの途中で障害物に当たり、それを解決するために迷い悩んでいる内に目的を忘れ真っ直ぐに走れなくなってしまう。

それは大多数の人に当てはまることで、自分がそうならない可能性などない。

などどティアナが深く考え込んでいると、

「えい」

突然、スバルが食べかけのアイスティアナの頬にくっつけた。

不意を突かれ、驚きのあまりスバルを突き飛ばしてしまった。

その拍子にスバルの手からアイスが飛ぶ。

「な、何してるのよアンタ！」

尻もちを付いていたスバルは「何かティア元気ないから元気づけようと思って」

そう言っただけで笑うスバルの表情に悪意はない

――全くアンタは・・・

と言おうとしてティアナが口を開きかけた。

ペチヨ

「・・・？」

ティアナは怪訝に思っただけらしい音がした先に視線を向ける。

そこにはスバルのアイスを顔面で受け止めている青年の姿があった。

ズルリと食べかけのアイスが青年の顔面からずり落ちコンクリートの上に落ちる。

気まずい沈黙が一瞬流れる

だが、あるうことに彼は

「怪我はありませんか？」と尻もちをつくスバルに手を差し出した。

「は、はい！大丈夫です！」

そのスバルの返事に彼は爽やかな微笑を浮かべ

「それは良かった」とスバルの手を掴み優しく立ち上がらせる。

スバルを優しく立ち上がらせる彼の仕草に下心の類は一切なく、それこそが彼の有りのままの姿だろうとティアナは傍から見ていて直感的に感じた。

「すみません、私の友達がご迷惑をお掛けいたしました。これ、よろしければどうぞ使ってください」

「いえいえ、こちらこそ僕が気を付けていればこうはならなかったでしょう」

ティアナが差し出したハンカチを受け取りながら青年はそう言った。

その青年をティアナは改めて観察する。

後ろで束ねて縛られている長髪は純白で、その紅い眼はルビーを思わせる。

顔立ちは端正で優しい雰囲気があるが、どこか影あるように見えるのは気のせいだろうか。

などと思っていると

「ハンカチを返しておきますね」

拭い終わっただのか青年はスツとハンカチを返してきた。

「どうも、すいませんでした。ってアンタも謝るのよスバル」

スバルの頭を強制的に下げさせる。

「構いませんよ、これ位。まだ僕は買わなければいけないものがありますので失礼させていただきますね、では」

青年はそう言うのと去って行った。

―と、そこで気付く

名前聞いた方がよかったかも・・・

「まあ、大丈夫よね。もう会うこともないだろうし。それにしても本当に温厚な人でよかったわねスバル」

「・・・」

「ってね、そもそもねスバル、アンタ反省して・・・」

いつもと様子が違うスバルを疑問に思ったティアナはその相方の顔を覗き込んだ。

「ティア、あの人すごくカッコ良かったよね！」

そう言ったスバルの顔は心なしか少し紅いように見えた。

第二話（後書き）

二話にしてこのグダグダ感。

大丈夫かなあ、と思ったりもしなかったりしたり・・・

技術もストーリーも中途半端な作者ですが、これからもよろしく願います。

第三話（前書き）

あらためて見てみると一話あたりの登場人物が異様に少ない。もうちょっと色々織り込ませていきたい、と思う作者であった。

第三話

時空管理局地上本部内、医療区画

その通路を二人の女性が歩いていた。

フェイト・T・ハラOWNとティアナ・ランスターの二人である。

歩く様子は凜としており二人ともその美しい容姿と合い合わさつて傍から見ている清々しいほどだ。

―と、その足が個室の前で止まった。

二人が足を止めた個室の扉には黒い文字で『003号室 ギエル・マックフォード』と刻まれた白い板が貼られていた。

コンコンと二回扉を叩く

そうすると「どうぞ」という男性のくぐもった声が返ってきた。

扉を開けるとそこには半身を起した男性がいた。

「ハラOWN執務官です、そしてこちらが私の補佐官の―」

フェイトに促され前に出たティアナは

「ランスター執務補佐官です」

二人の自己紹介を聞いた男も姿勢を正し「マックフォード一等陸士

です。お二人の噂はよく聞いています」と敬礼を返した。

「で、今回はどういう御用件でしょう」

「単刀直入に聞きますマックフォード一等陸士、あの任務中に何が起きたのかを」

その質問にギエルの表情が曇る。

「覚えていることだけでいいんです。知ってることを全部話してください」

グツと何かを堪えるようにギエル下を向いて押し黙る。

押し堪えるそれは喪失感と激しい自責の念が、一個人としては心の傷が癒えるまでそっとしておいてあげたいと思うフエイト、だが今自分に必要と

されているのは一個人としてではなく執務官としての役割だ。

それを果たすためにも心を鬼にして言う。

「この質問が一等陸士にとって辛いのは分っています、ですが再びこういう悲惨なことが起こらないようにすることも大切な務めだと思えます」

その言葉に彼は絞り出すように

「分かりました」と辛うじて応えた。

罪悪感を感じつつフェイトは自らの職務を全うするため口を開いた。

「ご協力感謝いたします。では、事件が起きた時の状況から話してください」

彼はゆっくりと口を開き語り始めた。

「自分達とあるロストロギアの回収作業を終えて帰還しようとした直後のことでした。その時、東の方向から何かが飛んでくるのを同じ分隊の魔

導士が発見したんです」

「タイミングからしてロストロギアを狙った魔導士だと考えられましたので追撃を防ぐために迎撃して捕獲することになったんです」

堪えていたものが吹き出し始めたのか彼は声を震わせ

「相手はたった一人で対するこっちは数十人、でも、奴は・・・奴は・・・あっさりと数十人の魔導士を、自分の仲間を目の前で・・・ふざけた笑いを浮

かべて・・・殺していったんです。そして最後には自分も意識を奪われ、・・・気がついたら」

押しとどめる物が崩れたのか彼は嗚咽を露にする。

「奴というのは？」

ティアナが問うとギエルは

「・・・白髪と紅い眼が特徴の男の魔導士で、歳は十代後半でアームドデバイスを使っていました」

（アームドデバイスっていうことはベルカ式の使い手？）

アームドデバイスとはベルカ式を使う魔導士達が扱うデバイスのことで何らかの武器の形をしている。

「自分が知っていることはこれで全部です」

精神的によほど辛かったのだろうギエルは疲れの色を顔に滲ませていた。

「辛いことを聞いてすいませんでした」

「別に構いやしませんよ。それより奴を必ず捕まえてください」

「マックフォード陸士とその死んでいった隊員達のためにも必ず捕まえてみせます」

同胞を無残に殺した殺人鬼を必ず捕まえてみせる、フェイトはそう誓った。

病室から出たフェイトの斜め後ろを歩きながらティアナは考えていた。

（白髪に紅い眼・・・）

ギエルのその言葉そ聞いた時、ティアナは一人の青年の姿を思い出した。

あの青年も白髪に紅い眼をしていた。

そういう意味であの青年と今回の事件の犯人とは身体的特徴が合致している。

が、ティアナにはあの青年がそうだとは思えなかった。

寧ろ怪しいのはギエルの方だと思う。

何故ならティアナは見てしまったのだ、俯き嗚咽を上げるその唇の端が笑うように吊りあがっているのを

そもそも一人だけ生き残ったというのがおかしい

それに、もし、人を笑いながら殺せる殺人鬼ならそれこそギエルも殺されているはずだ

更には軽傷で済んでいるのがおかしい

（何か考えれば考えるほどマックフォード一等陸士が怪しくなってくるわね）

「ティアナ、どうしたの？」とフェイトが訊いてきた。

「いえ、ちょっとおかしいと思う点があったので、それについて考えていたんです」

「おかしいところって？」

「何故一人だけ生き残って、それも軽傷で済んだのか。もし、相手がギエルさんの言うような殺人鬼だったらたとえ死ななかったとしても軽傷で済ま

ない筈です」

フエイトは「確かに、そうだね」と頷いた。

それは、あの笑みを見ていたからこそ言えたことであって、もし見えていなかったならば自分もマックフォードの言ったことを鵜呑みにしてしまったかもしれない。

「もうちょっと調べてみようか、ティアナお願いできるかな」

「任せてください」とティアナは応えた。

第四話

深夜、化粧室の洗面台の前にティアナは立っていた。

「こうなるなら見なきゃよかった・・・」とティアナは顔を上げて
呟き、目の前の鏡を見た。

その鏡に映るのは優れない顔色をした自分

（情けない・・・）

ティアナはそう思った。

たかが、データーに記載された現場写真一枚に嘔吐してしまうなど
執務官補佐として失格だろう。

いや、今は執務官補佐がどうのこののよりも、とティアナは気持ち
を切り替えさつき見た現場写真を思い出す。

その様子は凄惨の一言に尽きた。

そこには体をバラバラにされ、もはや肉片と化した死体も無残に腸
を抉り出された死体もあった。

殺人鬼、と言ったマックフォードの言葉が蘇る。

現場の在り様は正に人を殺すことに快楽を覚える殺人鬼の仕業のよ
うに一見える。

が、それはあまりに非効率すぎる殺害方法だ。

ロストロギアを狙った犯行ならばロストロギアだけを奪って逃げればいいし、口封じだとしてもこれでは時間が掛かり過ぎ増援が来ってしまう可能性

だっであつた。

それに、とティアナは鑑識の報告書の一部を思い出す。

それは死体の一部にほんの僅かだが食いちぎられたような痕跡があったという記述だ。

最初は死肉を漁るハイエナのような動物の仕業だとティアナも鑑識と同様に思った。

だが、しかし、あの付近に動物や魔物などは生息していない。

そもそもあの世界で動物や魔物の存在が確認されたことがない。

そういう世界なのだ。

あつたとしても植物ぐらいで、死肉を漁るものそれこそいない。

故に食いちぎられた痕跡があるというのは非常におかしいことなのだ。

（何かますます分らなくなってきたわね・・・）

疲れたティアナは今日のところはこれぐらいにして寝てしまおうと

決めた。

その時、

―ティアナ、起きてる？

―ハラOWN執務官、どうしたんですかこんな深夜夜遅くに？

突然のフェイトから念話にティアナは戸惑いながら言った

その上、気のせいかわわわしている

どうしたんだろう、とティアナは思った。

―実はね・・・

「デ、デートお！？」

あとに続けられたフェイトの言葉にティアナは素っ頓狂な叫びをあげてしまった。

―話は今日のお昼に遡る・・・

フェイトは久しぶりになのはやはやと一緒に昼食をとっていた。

「ほんま久しぶりやわ、この三人で昼食食べるんも」

「そうだね、フェイトちゃんは執務官の仕事で大忙しだし、はやてちゃんもロストログアの捜索で大忙しだから中々タイミング合わないよね」

「ほんまやな」

などと三人が話していると

「すみません、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

割り入ってきたのは一人の男、その男を見てフェイトは

「ギエル一等陸士、体の方はもう大丈夫なんですか？」

「ええ、もう明日から復帰できるようになりました」

「知り合い？」

そのはやての質問にフェイトは、うんと頷き

「ある事件の捜査で知り合ったんだよ」と応えた。

「ところで先ほどの返答をいただきたいのですが」

「私は大丈夫だけど」

「私がかまわへんよ」

「私も大丈夫だよ」

ありがとうございます、とギエルは席に座った。

「それにしてもハラOWN執務官が空軍のエース・オブ・エース高町一等空尉に元機動六課部隊長にして夜天の魔導書の持ち主、八神二等陸佐と

古くからの知り合いだという噂は本当でしたか」

「古くからの知り合いというよりは親友やな」

はやての答えに

「ほお、そうでしたか」と相槌を打つギエル

「私とフェイトちゃんとはやてちゃんは同じ中学校に通ってたんだよ」

「ほんま楽しかったなあ、あの頃は」

そこからは三人の出会いやその後のことなど色々と話した。

ギエルは相槌を打ちながらその話を聞いていた。

『ごちそうさまでした』

四人とも食事を終えフェイトも席を立った。

その時、ギエルが

「ハラウン執務官、明日暇ですか？」と聞いてきた。

その問いにフェイトは

「夜からならありますけど」

なら良かった、とギエルは続けて

―明日一緒に食事に行きませんか？

思ってもみなかった言葉にフェイトは混乱し、深く考えずに暇だと応えたことを今更ながら後悔した。

第四話（後書き）

最近、迷走中の作者のために意見や指摘でもいいのでコメントください。

勿論励ましのコメントも募集しています。

あと彼女も募集中です（嘘）

第五話

黄昏時

仕事帰りなのか疲れた表情を浮かべるサラリーマンやキャリアウーマン、旅行からの帰りなのか荷物を両手に持ちながら楽しそうに思いう話をしている夫婦。

その男性の背中にはぐつすりと安らかな寝顔を見せる子供。

そんな駅の人混みを少し離れた場所からフェイトは見ていた。

こうして執務室から離れ、久しぶりに街に出て管理局局員として自分たちが常日頃守っているものをフェイトは改めて実感していた。

ごく普通のありふれた時間、その時間がどれだけ掛け替えないものか、今まで生きてきた経験でフェイトはよく痛感している。

だからこそ自分たちは守っていかなばならない、フェイトは改めてそう決意した。

―と、向こうから一人の男が駆け寄って来た。

「こんばんわ」

駆け寄ってきたのはブロンドのいかにも二枚目な顔をした男だ。

「こ、こんばんわマックフォードさん」

フェイトには異性の知り合いが少ない、その中でも同年代の人はユーノやクロノぐらいなものでそれもユーノはなのはと、という感じがあるしクロノ

はクロノで義理の兄で自分が十五になるときに結婚している。

そういうことで異性の人との付き合いも少なく、一対一の食事に誘われることなど今までなかったのだ。

つまり、初めてのことなのでフェイトはかなり緊張していた。

それに、例の事件のこともあるので胸中は複雑だった。

「ギエルさんでいいですよ。ついでにこちらもフェイトさんと呼ばせていただきます」

「え、あの・・・」

有無を言わせぬ強引とも言えるその口調にフェイトは戸惑う。

ギエルはフェイトの爪先から頭まで視線を這わせ

「それにしても私服姿も美しいですな」

——ッ——！

一瞬、気味の悪い視線を感じたフェイトはギエルの顔を見たがそこにはいつもと変わらぬギエルの表情があった。

「顔色が悪いようですがどこか具合が悪いので？」

「たぶん、仕事の疲れが出たんだと思います」

フェイトはギエルに当たり障りのない適当な答えを返しておいた。

「気のせいかな・・・いや、さっきのは私の気のせいなんかじゃない。じゃあ、誰が・・・」

フェイトはあたりを見回し、それらしき影を探すが一向に見つからない。

「あの・・・どうかしましたか？」とギエルが訊いてきた

フェイトの様子があまりにもおかしいのを見て心配したらしい。

「い、いや、何でもありません」

「それではいきましょうか」

「はい」と答えたフェイトはギエルのその後について行った。

その一部始終を見つめていた青年が一人

白髪と禍々しい程に紅い眼をしたその青年、卯月・キヨウは駅の屋根の上にある死角に身を潜めていた。

「危ないところでしたね」

とつさに身を死角に伏せたから視認されたということはないだろうが、それでも気配で察知されているかもしれない。

「どっちにしる尾行することは変わりありませんから」とキヨウは屋根の端に足を掛ける。

チラリ、とその視界の端、気になるものがあつた。

それは自分と同じく二人を尾行するように動く二つの影

何でしょう、と思つて影を注視するとそれは二人の少女だつた。

その二人の少女にキヨウは見覚えがあつた。

（まさか、あの時の・・・？）

思い出すのは最近、ショッピングモールで出会つた二人の少女

極々普通に人としてキヨウに接してくれた数少ない人

幼いころよりキヨウは白髪に紅い眼という容姿と親に全く似なかつたこともあつて忌み子、あるいは鬼子などと呼ばれ忌み嫌われ、または恐怖されてきた。

故郷を出てもそれは大して変わらず、せいぜい鬼子とか忌み子とか言われなくなっただけで、避けられたり不吉なものとして他人から扱われることは同じだつた。

そんなキヨウにあの少女達は普通に、寧ろ、優しく接してくれた。

勿論、それは赤の他人に対しての優しさだろう。

だけど、それでも、心優しい彼女達がこの事件に巻き込まれ不幸な目に合うことはあってはならない

キヨウはそう思う。

そして、

その為にも

―対象が彼女達に接触する前に殺す

誓いを胸にキヨウは飛び出した。

黄昏時から夜へと空は移り変わりつつあった

特に何事もなく食事を終えたフェイトとギエルは夜の公園に来ていた。

「どうです中々おいしかったでしょう」

「はい」

公園を歩きながらフェイトは一つ違和感を感じていた。

それは、あまりにも気配がなさすぎるということだった。

人どころか生き物の気配すらない。

―と、

「そろそろ効いてくる時間だな」

ギエルが時計を見ながらそう呟く。

何のことが分からなかったフェイトがその意味を訊こうとした
直後、それは来た

「あ、あれ・・・？」

急激な脱力感に襲われたフェイトは思わず地面にへたり込む。

一体何が、というフェイトの疑問に答えるように

「食事にちよつと毒を混ぜたんですよ、死ぬことはないので安心し
てください」

ギエルが言った。

その声は今までとは違う。

ドス黒いものを感じさせるその声に顔を上げるとそこには見下すよ

うな嘲笑に歪むギエルの顔があった。

「何のつもりですかマックフォード一等陸士」

睨むフェイトにギエルは更に嘲笑を濃くして

「前々から自分は執務官殿に興味がありまして、今日は執務官殿に『女の悦び』というものを教えてあげようと思ひまして」

ギエルのその視線にフェイトは馴で感じた気味の悪い視線を思い出した。

「では、さっそく始めるとしましょう」

ギエルはフェイトの首筋に無理やり顔を埋めようとする。

「ッ、いやあ!!」

生理的な嫌悪にフェイトは残っている力を振り絞ってギエルを突き飛ばした。

「はあはあ・・・」

肩で息をするフェイトの視界で突き飛ばされたギエルが静かに立ち上がる。

「優しくしてやろうと思っていたのに、生意気に逆らいやがって・・・」

怒りを滲ませ、ゆっくりと近づいてきたギエルはフェイトの髪を乱

暴に掴み上げた。

フェイトは抵抗しようとするが力の抜けた体では無理な話だった。

「こついう悪い子には躑つてやつをなあ!!」

容赦なく振りかぶられた手がフェイトの頬を打つ。

続けざまに二回、三回とギエルの手が振るわれた。

それでもなおフェイトはギエルを睨みつける。

「まだ足りないみたいだな」

ギエルが手を振りがぶろうとした。

その時、

「動かないで」

冷たい少女の声にギエルがその手を止め、声のした方を見た。

フェイトもそれに吊られて視線を向ける。

そこには拳銃型の二丁のデバイス、クロスミラージユを構えたティアナとバリアジャケットに身を包んだスバルの姿があった。

第五話（後書き）

えー、どう見てもグタグタです。

戦闘シーンとかどうしようかな、とか、ヒロイン誰にしようかでちょっと迷うかもしれないので更新が遅くなるかもしれません。

色々と至らない作者ですが、今後ともよろしくおねがいします。

ちなみに今考えているヒロイン候補はフェイト、スバル。
あと意外性でシグナムさんとなっております。

というかシグナムさんがヒロインの作品がないのが作者には不思議で仕方ありません。

デレたら一番殺傷能力あるだろうに・・・もったいない。

第六話（前書き）

遅くなってしまうてすいません。

次からもうちよつと頑張ります。

では、魔法少女リリカルなのは 漆黒の狂剣士、第六話 お楽しみ
ください。

第六話

ティアナは銃口の先に立つギエルに睨みを放っていた。

その銃口の先、ギエルが驚いた表情を浮かべて立っていた。

余程予想外のことだったのかギエルは一瞬呆けたような表情を浮かべていたが、直ぐにいつもの顔を取り繕うと

「これはですね・・・」

「黙ってなさい！」

弁明をしようとするギエルにティアナは怒りを抑えきれずにそう言い放つ。

鋭く言い放たれたティアナの言葉にスツとギエルの顔からいつもの穏やかな表情が消える。

「全く・・・上手くいったと思ったのによ」

穏やかな表情の仮面が外れたそこには下賤な笑みを浮かべるギエルの顔があった。

これがコイツの本性か・・・とティアナは確信する。

「で、どうするつもりだ。執務官補佐殿？」

「その汚い手をフェイトさんから離しなさい」

「酷い言いようだなあ、まあ、離してやるよ」

ただし、と付け加えたギエルは「お前らには死んでもらうがな!」

「ティア!」

スバルのその声にティアナはとつさに左に跳ぶ。

さっきまでティアがいた場所に何発もの紅い球が殺到し、粉じんを上げて地面が砕ける。

「交わされちまったか、まあ、いいや」

いつの間に取り出したのかギエルは杖型のデバイスを構えていた。

「二対一よ。勝てると思ってんの」

「確かに以前の俺なら勝てねえだろうけどな・・・」

——ッ!!

ティアナは異様な気配がギエルから放たれるのを感じた。

（何なのよ・・・この感覚は）

それは背筋が凍るようなおぞましい気配だった。

「くつくつく・・・、感じているんだろ。この力の波動をなあ!!」

ギエルの周囲に二十もの紅い球、スフィアが一斉に出現

「死ね！」

放たれたスフィアがティアナとスバルが襲い掛った。

迫りくるスフィアを撃ち落とすためにギエルと同様にティアナもスフィアを展開、発射

ギエルの放ったスフィアはティアナのスフィアに迎撃され、相殺される。

「流石は執務官補佐殿、やりますなあ」

「そう思っならさっさと白旗あげなさい」

スフィアを撃ち出しながらティアナは走る。

「はあああああ！」

その反対側、地面に緩やかな弧を描いてギエルに迫るのはスバルだ。

対するギエルはスフィアを再び放つ。

次々と襲い来るスフィアをスバルが複雑な機動で回避、一気に距離を詰めた。

しかし、その進路にスフィアを展開されたスバルは攻撃を断念、プロテクションを張って防御している。

―コイツ、一体・・・

先ほどからギエルはずっとスフィアを打ち続けている。

にも関わらずその顔には疲労の色が全く見えない。

一等陸士でありながらこれほどの魔力量を持つものならば噂になつていてもおかしくない筈

―いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない

再びスバルが間合いを詰めようと接近するが、次々と出現し撃ちだされる何十発ものスフィアに阻まれ防戦一方の様子で、自分も撃ち落とすのに精一杯だ。

―ティア、この人強いよ！

―言われなくても分かってるわよ！

「さて、そろそろ終わりだ！」

その声と同時にスバルを取り囲むように展開されるスフィア

「スバル！！」

プロテクションを張る間も与えずスフィアはスバルに襲いかかった。

だが、

「幻影！？」

空気に溶けるように消えたスバルを見て、ギエルは驚愕の声を上げる。

ギエルが見せた僅かな隙

―スバル、今よ！

ティアナの念話に応えたスバルが一気に突っ込む

ギエルはとつさにスフィアを放とうとするが速過ぎるスバルの機動に追い付けない。

「ティバイン・・・」

「ーッ！！」

膨張、収束していくスバルの魔力にギエルは顔を引き攣らせる。

「バスターー！！」

裂帛の気合と共に放たれたスバルのティバインバスターとギエルがとつさに張ったプロテクションが衝突

一瞬の拮抗

だが、スバルの一撃はプロテクションを紙の如く貫き、そのままの勢いでギエルを飲み込んでいった。

砂煙が晴れたそこには仰向けに臥せるギエルの姿があった。

「大丈夫ですかフェイトさん？」

「私は大丈夫」とフェイトが立ち上がろうとするが、直ぐによろけてしまう。

倒れそうになったフェイトをティアナは支え

「しばらく自力では歩けなさそうですね」

「みたいだね」

―スバル、アンタ手貸しなさい

とティアナは言いかけて止まった。

ゆっくりと立ち上がるギエルの体から放たれる異様な気配に

ズブリ、とギエルの背中から黒い物が生えた。

足にも似たそれは血に濡れて怪しい光を放っていた。

同じようにまた黒い物が背の肉を突き破って生えていく。

次々と足が生えていき、蠢く黒い泥がギエルの体を隈なく覆っていた。

異常なその光景に全員、言葉を無くしていた。

―と

突如、黒い靄から伸びた影がスバルに襲いかかった。

とつさのことにスバルは対応できなかったのか直撃を食らい、吹き飛んだ。

その体は公園の木を何本か押し折ったあと止まった。

「スバル!!」

返事はなくぐったりとしている。

助けに行こうか、と思ったその時

『よくもやりやがって・・・』という声と共に黒い靄の中からそれは姿を現した。

体長ハメートルのその影は巨大な蜘蛛に似た異形だ。

異形は人間の上半身と蜘蛛の胴を合わせたような姿をしていた。

『驚いたか？そうだろうなあ、俺も最初は戸惑ったよ』

口調はギエルそのものだが発せられる声は人のものではない。

『この力が一体何なのか、っていう顔をしてるな。いいだろう、冥土の土産代りに教えてやるぜ』

ギエルの口から過去が語られる。

第六話（後書き）

登場人物の口調が把握しきれませんでした。

特にティアナとフェイトは分らないところが多々あったりして意外と悩みの種

何かおかしいな、っていうところがありましたら意見ください。

できる限り手直しますので、よろしくお願いします。

第七話

繁華街の外れ、怪しい店が立ち並ぶ通りをギエルは歩いていた。

「クソー!!」

いらただしげに吐き捨てたその顔は赤く目も座っている。

「何でも上手くないんだ！」

父、ゲイル・マックフオードは十五歳の頃から管理局に勤めていた。

父は魔法の素質こそなかったが持前の狡知を生かして同年代のライバルを次々と蹴落とし、文字通り踏み台にして押し上げてきた。

その成果として最終的には少将を務めたこともある。

現役から退いた現在でもなおその発言力や影響力は高く、今は亡き人だがレジアス・ゲイジ中將とも繋がりがあつたらしい。

その父の子としてこの世に生を受けた時からギエル・マックフオードの人生は決まっていた。

彼はそのことを自分は『選ばれし者』として生まれてきた結果だと受け取り、父もそれを肯定してきた。

故に彼は人を差別するようになった。

『選ばれし者』と『そうでない者』の二つに

そうしてずっと生きてきた。

二十歳になった彼は管理局の地上部隊に志願した。

父とは違いそれなりに魔力の素質があつた彼は無事に試験を通過、晴れて管理局の魔導士となった。

管理局の魔導士となつてしまえば、あとは父が手配した通りに昇進していくだけだ。

実績など必要がない、何故なら自分は『選ばれし者』でその権利があるからだ。

順調にレールの上を滑って行くかに見えた彼の人生

だが、

どういつ訳か一年経つても、二年経つても来るべきはずの昇進の話は来なかった。

疑問に思つて父に問い質してみると、自分の隊の隊長が「彼に昇進は相応しくない」と上層部に報告していたからだつた。

更に、その上層部の人間が自分の父の息がかかっていない人物で尚且つ現役で発言力もあるために昇進の話を持つてくる事ができなかったのだ、と答えた。

それを聞いた彼は即座に隊長に問い質した。

―何故、自分は昇進に相応しくないのでしょうか

隊長は一言

―お前は人の上に立つのに相応しくない

とだけ答えた。

その言葉に彼のぶくぶくと太り過ぎた自尊心は深く傷つけられ、傷つけられたことに対する憎悪が静かに沸いてきた。

（俺は俺は、お前ら『そうではない者』とは違う『選ばれし者』なんだぞ、その俺が人の上に立つのは相応しくない、だと・・・）

去っていくその背中を見ながら彼は心の中で呟いた。

そして、

―コイツを殺したい・・・

彼は沸き起こる殺意を胸に隠し、傷つけられた怒りを誤魔化すためこの怪しい通りに来ていたのだ。

「クソ！イライラする・・・」

彼がイライラするのは昇進が上手くいかないだけではなく、『そうでない者』が自分よりも上に立っているということもあった。

その中でも筆頭なのがフェイト・T・ハラオウン執務官だ。

エルハザードがどこかにあると信じ、たかが娘一人を蘇らせるためにロストロギア『ジュエルシード』を使い世界を破滅の危機に陥れた広域次元犯罪者プレシア・テス

タロツサ。

その娘があることが『選ばれし者』である筈の自分より上にいる。

それは彼にとって非常に許せないことだった。

彼がどうしようもない怒りを持て余していたその時、

「力が欲しいんですか」

その声が問う。

「誰だ手前・・・」

そこにいたのは白衣に身を包み、奇妙な面を被った背の小さい男がいた。

「私ですか、私はですね」

―人間観察が趣味の狂人です

と返してきた。

続けて

「今日はあなたに相談があつてきたんですよ」

「殴りたいのか、このクソ野郎」

男はギエルの脅しを気にするでもなく

「あなたが所属する部隊が回収するロストログアを私に譲ってくだ
さいませんか」

と、サラリと言った。

――！！

（自分たちの部隊がロストログアの回収の任に当たることを知って
いるものは一部だけの筈、それを何故コイツは・・・）

彼の動揺を余所に白衣の男は

「勿論、報酬はあげましょう」

「帰る」

この男の話をこれ以上は聞いてはいけなと思った彼はその場を立
ち去ろうとした。

だが、

「殺したい人がいるんでしょう」

掛けられた一言に足が止まる。

「なら、殺せばいいんですよ。『選ばれし者』としてあなたにはその権利がある」

「どうすればいいんだ」

その言葉に白衣の男がニヤリと笑ったように彼には見えた。

「無事に目標を発見、これより回収する」

陸士部隊を率いるその男は何事もなく目標を発見、回収できたことに安堵の息を吐く。

ロストログアの暴走もなく、違法魔導士の襲撃もなかった。

今のところは順風満帆といった具合で特に注意することもない。

が、直ぐに気を引き締め直す

油断大敵、それが自分の口癖だ。

トラブルもなく順調に進んでいることから来る油断や慢心から綻びが一气に出て破綻しまうことは多いものだ。

故にどんなに順調であっても慢心せず常に適度な緊張を保つことが大事なのだ。

そう自分を諷めた彼は部下に念話を飛ばした。

「アルファ5、異常は無いか？」

「……………」

「反応がない……。いや、見つからない？」

おかしい、と思った彼はそこで気付く。

周りの異変に

「空が紅い……」

いつの間にか空だけではなく、砂漠まで気味の悪い紅に染まっている。

そして、

「何だアレは？」

そこには地面があつた。

一度も見たこともない文字が何百、何千と出鱈目に刻まれた地面が彼にはそれが何を意味するのかは分らなかったが、一文字一文字が禍々しく邪悪なオーラを放っていることだけは理解できた。

「隊長！」

駆け寄ってきたのは副隊長だった。

「どうした副隊長、何があった？」

「いえ、自分にもよく分りません。ただ各個撃破されるぐらいなら合流した方がよろしいかと思ったので」

「そうか、では・・・」

唐突に水のようなものが自分の顔を濡らす。

触ってみるとヌルリとしていて生暖かい。

一体何だ、と思って指についたものを見て思考が止まる。

血

恐る恐る横を見るとそこには上半身を失った副隊長の姿があった。

『ククツ、はははは！凄えなこの力は！』

もはや物言わぬ肉片と化した副隊長の背後、異形が笑っていた。

人間の上半身と蜘蛛の下半身をくっつけたその異形が

その口の端にぶら下がっているのは副隊長の腕

「貴様、ギエル！！」

「あれ、よく分ったな」

「貴様、何のつもりだ！」

ククツ、と笑ったギエルは

『殺したいから殺すだけ、シンプルでいいだろう』

「貴様！！」

隊長は瞬時に四個のスフィアを展開、発射する。

防ぐ暇をも与えずに放たれた四発ものスフィアがギエルの顔面に直撃。

― 怯んだ隙に追撃を！

更にスフィアを展開する。

だが、

「なッ！！」

怯んだ様子もなく素早く伸びてきた手に隊長は捕まえられる。

「まだだ」

展開していたスフィアを発射、顔面に直撃する。

が、

怯んだ様子もなく握られた手に体を締め付けられる。

『さて、それでは本日のメインデッシュといこうか』

鋭い牙が並んだその口をゆっくりとギエルが開く。

脳裏をよぎるのはさっきの副隊長の姿

「な、何をする気だ」

『隊長は俺の血肉になるんだ。どうだ嬉しいだろ』

「や、やめ・・・」

バクン

研ぎあわされた牙が隊長の体を両断した。

『クツクツク、あの時は最高の気分だったぜえ』

血生臭い惨劇をさも楽しそうに語ったギエル

そのギエルにティアナは抑えきれぬ感情が湧き出すのを感じていた。

それは怒り

仲間であつた者を殺し喰らつたにも関わらず語る口調には罪悪感の欠片も見えない。

そして、それを喜々とした表情で語るその神経がティアナには到底信じられなかった。

だから、

「最低ねアンタ」

『あ?』

「アンタみたいなのが人の上に立てる訳ないじゃない」

その言葉にギエルの肩が震えた。

『この俺を馬鹿に・・・するなあ!』

轟

唸りを上げて振り下ろされた腕がティアナを押し潰した。

が、

『また幻影か!』

その言葉を肯定するようスッと空気に溶けていくように消えるティアナ

そして、本物のティアナは既にギエルの背後に回り込んでクロスミラージュを3rdモードに切り替えていた。

「ファントム・・・」

『――！』

いつの間にか背後に移動し、大技を放とうとしているティアナにギエルが動揺を露にする。

―プロテクションなんて張らせない、この一撃で仕留める！

その意志を込めトリガーに指を掛け

「ブレイザー！！」

放たれたのは一条の光

その光は一直線にギエルを飲み込もうと迫った。

だが、

―え・・・？

ティアナは見た。

放たれた光が見る見るうちに減衰、消えていくのを

次の瞬間、凄まじい衝撃がティアナの体を突き抜けその余剰エネルギーを受けた体が地面を転がる。

『おもしれえ、こういう力もあるのか』

―AMF!?

AMFとは簡単に言ってしまうえば魔力を無効化してしまうフィールドのことだ。

『さてと、さっきはよくも俺をコケにしてくれたなあ』

サデイスティックに染まったギエルの声が近づいてくる。

ティアナは立ち上がろうとするが体に走る苦痛に指を動かすのが精いっぱいだ。

『たっぷり髑つてから俺の血肉にしてやろっ』

ギエルがティアナに腕を伸ばそうとした。

その時、

身を突き抜ける感覚に全員が一瞬、息を止めた。

殺気

それも自分の血が凍ってしまったのかと錯覚を覚えるほどの凄まじい殺気だった。

「こんばんわ」

ティアナが視線を向けたその先には一人の男

外灯の上に立つ白髪に紅い眼の男はショッピングモールで出会った青年と瓜二つだった。

『何だ手前は』

思わぬ乱入者にギエルが問う。

その問いに対し青年は

「あなたと同じ同類です、そして・・・」

―あなたを殺しに来ました

と大剣の切っ先をギエルに向けて静かにそう告げた。

第七話（後書き）

まず、はじめに一言

毎度更新遅くなって申し訳ありません。

たぶん、更新のペースは二日ぐらいいを目安になると思います。

第八話

――間に合いませんでしたか

地面に倒れ臥せる二人の少女の姿を見てキョウはそう思った。

微笑の仮面の下、奥歯を噛みしめ取り繕った表情が崩れるのをこらえる。

――余計な邪魔さえなければ・・・

脳裏に思い出されるのは突然現われた敵のこと

尾行している背後から奇襲を仕掛けてきたのは丸く細長い形をした数十体もの自律機動兵器

その自律機動兵器の殲滅に時間が掛ってしまった結果

今、二人の少女が命の危機に晒されている。

その結果に激しい自責の念を感じながらもキョウは何とか気持ちを切り替える。

必要なのは自分を責めることなく、冷静に状況を見ること

チラリ、と二人の少女の状態を観察

（死んではいないようですね。しかし・・・）

―タイムリミットはある

その事を念頭に置いたキョウは体から無駄な力を抜き心を落ち着かせる。

『同類？殺しに来ました、だと・・・』

次の瞬間、ギエル、いや、異形が肩をゆすり堪え切れなかったかのように笑いだした。

『おもしれえジョークじゃねえか、坊主。お前が俺と同類？ハッタリもここまで来ると見事だよなあ』

「僕の言葉がハツタリだと思いますか」

殺気を孕んだその一言に異形の笑いが、ピタリと止まる。

さつきとは一転して警戒の色を露にした異形

ピリピリと張詰めた空気にキョウは自分の中に流れる血が疼くのを感じていた。

その空気を先に破ったのは異形だ。

唸りを上げ、丸太のような拳がキョウに撃ち込まれる。

その巨体から生み出される拳圧を直に体感しながらキョウは外灯から飛び降りた。

と、同時に走り出す。

直後、

さっきまでキョウがいた場所に異形の脚が深々と突き刺さっていた。

お返しとキョウはバルムンクを一閃

血飛沫が上がり、切り飛ばされた脚が宙を舞う。

叫びが上がる

痛みを訴える叫びが

『よ、よくも俺の脚をお!!』

一斉に解き放たれる二十発ものスフィア

自分に向かってくる大量のスフィアにキョウは

「カートリッジリロード!」

機構が駆動、炸裂音とともに吐き出される大型カートリッジ

キョウは一旦立停止、上段の構えを取ると向かってくるスフィアに
逆に突っ込む

「ソニック・・・」

好機とばかりに二十個ものスフィアが食らいつこうとする。

が、

「ブレード!!」

叫びと共に振り下ろされた刃が一瞬にして三つの鮮やかな銀の軌道を宙に描く。

その刃は二十個のスフィアを全て断ち切っていた。

真つ二つに切られたスフィアはキョウの後ろで炸裂、もうもうと煙が上がる。

『ーッ!』

その隙に異形の足元に潜り込んだキョウはあっさりと二本目の脚を斬り飛ばす。

『舐めるなあ!!』

突如、進路を塞ぐようにスフィアが展開、と同時に発射

避け切れず二、三発まともにもらう。

追い討ちを掛けるように襲いかかって来た足をキョウはバルムンクで何とか弾く。

「キツイですね。ですが・・・」

戦いに飢えた血が、もっと、もっと、と求めてくる。

その衝動に任せキョウは更にバルムンクを振る。

斬られた脚から血が噴き出す。

『ぐああああ、て、てめえ！絶対に殺す！！』

怒り狂ったギエルが吠える。

「できるものならどうぞ」

その怒りを齒牙にもかけずにキョウは言う。

頭まで血が上っているであろう異形に対し、キョウは声を上げて笑ってしまいそうになるのを我慢していた。

―と、唐突に異形が何かを見つけ、

ニヤリと異形が仮面の下で笑ったようにキョウには見えた。

突如、突進を仕掛けてきた異形

しかし、

突進してくる異形の目を見てキョウは

（・・・僕を狙っていない？）

―では、だとすると一体何を狙って・・・

ハッ、とそこで気づく

（まさか！？）

異形が向う先には金髪の女性が一人。

その女性はどういう訳かは知らないが立ち上がることにすらできないようだった。

――畏だ

と、思考が答えを出す前に体は既に動いていた。

地面を蹴り女性に向かって一直線に走る。

そこに冷静な思考などなく、あるのは愚かな衝動のみ。

異形を追い抜きキヨウは女性に向かって駆けた。

走り切ったキヨウはその勢いを殺さず体をぶつける様にして女性を強引に突き飛ばす。

刹那、

凄まじい衝撃に体だけではなく思考も吹き飛ば

無防備に宙を舞っている状態をマズい、と思うより先に異形の拳が視界一杯に迫っていた。

――ッ！

直撃

アスファルトに叩きつけられるキョウの体

骨が軋み、内臓が揺すぶられ、いくつかは破裂した。

「ぐあ・・・」

瞬く間に体を駆け巡る激痛にキョウは呻き声を上げた。

―プロテクションを・・・

そこに容赦なく異形の脚が振り下ろされる

グシャリ

夜の公園に肉が潰れたような音が響く

だが、

それはキョウではなく異形の体から生まれていた。

そして、その異形の脚はどういうことが捻り潰され、おかしい方向に曲がっている。

『あ・・・？』

「随分と間抜けな声を上げるんですね」

キョウはそう言って立ち上がる。

その左手に纏わり付くのは黒い闇

左手から伸びた闇は異形の脚に絡みついていた。

そして、それはゆっくりとだが万力のような力を込めて折れた脚を更に締め上げる。

次の瞬間、肉を無理やり引き裂きながら黒い闇が異形の脚を千切り捨てた。

『あああああああ！』

一泊遅れて異形が叫びを上げる。

『く、くそがあああああ！』

再び突進してくる異形を見据えつつ、キョウはバルムンクを構える。

「カートリッジリロード」

続けざま二発のカートリッジが炸裂、硝煙を上げて排出された。

キョウは体のコンディションを大まかにチェックした。

内臓破裂に全身打撲、致命傷ともいえるダメージを負った今の状態から繰り出せるのはたったの一撃

そのたったの一撃で迫る異形を葬り去らなければいけない。

もし失敗すればキヨウは間違いなく殺される。

殺され死ぬことに恐怖はない。

ただ、

―僕には果たさなければならぬ責務がある

その為にも死ねない、死ぬわけにはいかない。

そして、

彼女達を死なせぬためにも

解き放たれた矢の如くキヨウは地面を蹴り駆ける。

迫ってくる巨体に怯むことなく突っ込む。

轟

丸太のような剛腕から撃ちだされる拳にも構わずキヨウは更に突っ込んでいく

異様な拳圧にコートの肩が一字に裂ける

一気に拳を切り抜けた先、その懷にキヨウは潜り込む

そして、

「タナトス・・・」

バルムンクの刀身が黒い光を帯びて伸び一瞬にして刃渡り十メートルの刃となる。

『――!!』

「グレイブ！」

懐に入られてしまった異形にその一撃を交わすすべはなく

一閃

一泊遅れて血飛沫が噴き上がり血の雨を降らす。

遅れて地面に落ちてきたのは異形の首。

首を失った胴体がゆっくりと地響きを轟かせ、倒れた。

ジワリ、とアスファルトの上、染み広がっていく血だまり

「ふふっ、くくく・・・あははははは!!」

その血だまりの中、全身を血で真っ赤に濡らしながらキョウは狂った様に笑っていた。

第八話（後書き）

そんなこんなで第八話終了です。

今回の話で一番苦労したのが技名とその効果を考えることでした。

ちなみに今回キョウが使用した黒い闇については別の話で説明をいれるので、よろしく。

では、また次話でお会いしましょう。

ばいびー
♪

第九話（前編）

パラパラと捲られていく紙

その紙の上に並ぶのは無数の文字や記号、専門的用語

調査資料と銘をうたれた紙の束に八神・はやては目を通していた。

その顔からはいつもの穏やかな表情は身を潜め、代わりに十九歳とは思えない真剣で大人びた表情を見せていた。

コンコン

控え目なノックにはやては顔を上げ、どうぞと言った。

開いたドアから最初に飛び出してきたのは小さな影

「はやてちゃん。連れてきたですよ」

その影ははやてに文字通り飛びついた。

「ご苦労さんやったねリン」

リンを労うはやて。

リンと呼ばれたその影は人の肩に乘るぐらい小さな姿をした少女だった。

続いて入ってきたフェイトがその様子に強張らせていた顔を綻ばせ

る。

「フェイトちゃん、怪我の方は大丈夫なの？」

「うん、大丈夫。私は殴られたただだから・・・」

そう答えたフェイトの頬には湿布が張られていた。

でも・・・、と言いかけたフェイトに

「ティアナもスバルも今は落ち着いとるってシャルが言ってたから大丈夫やる」

「うん・・・」

少しでも元気づけようとそう言っただけだったが、答えるフェイトの声に力はなく顔も曇ったまま

（人一倍責任感の強いフェイトちゃんのことや。きっと、私がしっかりしていなかったせいで・・・、なんて思ってるんやろうな）

フェイトという人物をよく知っているはやてには彼女が悔しさにも似た感情に苛まれていることが分かっていた。

そういう彼女だからはやてはフェイトとこれまで良好な友人関係を続けてこれた。

だが、今はその責任感が悪い方向に働いている。

責任感は大変だがあまり自分を責め、それを引きずることがあって

はならない。

―さて、どうやって元気づけたらええんやろうか

などと考えていると

コンコン

再びドアをノックする音

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは白衣を着た中年の男

「えっと・・・、鑑識の結果が出ましたのでご報告に上がりました」

適当な敬礼をしたその男にはやては眉を顰めるでもなく

「ご苦労さん。思ったより早かったね」

「ええ、中々興味深い物だったので久しぶりに働いて疲れました」

ボサボサの手入れされていないであろう髪を掻く男、その白衣や頬には赤黒い血がべつとりと付いていた。

「あれ、アンタ誰？」

初めてフェイトの存在に気づいたように男は聞いてきた。

「フェイト・Ｔ・ハラオウンです。あなたは？」

「ん、俺は山田・次郎だ。鑑識班の室長代理をやってる」

たがいに名乗りを交わした二人

「ちょうどええわフェイトちゃんにも鑑識の結果教えたって」

「では、報告を開始いたします」

途端に真面目な口調で山田が話し出した。

「最初にあの異形の死体の血液から採取されたDNAと管理局のデーターベースに残されていたギエル・マックフォードのDNAを照合したところ、両社は99.99%

同一のものと確認しました」

「続いて死体を解剖したところ胃袋から明らかに複数の人骨だと思われるものが出て来たのでその骨からDNAを採取し、先ほど同じようにデーターベースに

照合した結果・・・」

―例の陸士部隊壊滅事件の被害者全員と一致しました

その言葉が意味することにはやてとフェイトは思わず顔を顰めた。

「それと非常に興味深いことが一つ」

「興味深いこと?」

「はい」

山田が一枚の資料を机の上に差し出す

―これは・・・?

はやてが惹きつけられたのは一枚の写真

その写真には不気味に光る黒い球体

「室長代理、一体これは何やの?」

「リンカーコアです」

山田の一言にフェイトも改めて写真を見直す

―これが、リンカーコア・・・!?

リンカーコアとはこうも禍々しい光を放つ物だったか?

「御覧のとおり普通のリンカーコアではありません」

続けて

「このコアは明らかに人為的な手が加えられて強化されています。それも超強力に」

「強化ってなんやの？」

「魔力の吸収力、出力だけならAランクの魔導士のリンカーコアにも匹敵します」

――！！

Aランクの出力と同等ということは一年前Bランクだったスバルを上回っている。

「ところでどういう風に手が加えられてたん？」

「解析したところ出た結果は不明、私の個人的な考えですが呪術によるものかと」

「呪術っていうと丑の刻参りみたいなもん？」

「いえ、それほど生易しいものではないと思います。実際、何人があてられたのか気絶してしまいましたから」

「気絶・・・ってそんなことあるんか」

事実です、と答えた山田の顔に嘘はなかった。

「以上が現在の時点での結果です」

報告を終えたのか山田は大きな欠伸を一つ

「ありがとうな」

「ん、では、失礼します」

ガチャリ、と山田がドアの向こうへと帰って行ったのをはやては見届けて

「ああ見えても仕事はしっかりやる人なんよ」

普段はただのヘビースモーカーやけどね、とはやては心の中で付け足しておく。

はやては半透明のコンソールを操作しながら

「鑑識の報告も聞いたところやし、そろそろフェイトちゃんにも話してもらおうか」

「この事件の一部始終について」

第九話（前編）（後書き）

ちよつくらグタグタ、でも気にしない。

しかし、またもや更新が遅れたことに関しては誠に申し訳ありませんでした。

ではやてさんの言い回しですが、どうでしょうか

何かご意見ありましたら感想ください、待ってます。

第九話（後編）

血だまりの中、ケタケタと狂ったようにそれは笑っていた。

白髪を血で濡らし、体を揺すって笑うその姿はまさしく異常者

異常者を前にフェイトは戦慄を覚えていた。

その青年の傍らには首を絶たれた異形の死体

異形、もといギエルを殺したのも青年だ。

人を殺すことに楽しみを覚え笑うその青年の精神構造はフェイトには到底理解できないし、したくもない。

ただ、

コレに関わってはいけない、

という事だけは少なくとも分っている。

―と

唐突に青年が咳きこみ始めた

続いて、その口から吐き出されたものが湿った音を立ててアスファルトに落ちた。

フェイトが見たそれは、赤黒い血

――！！

「ぐ、……流石に、直撃はキツイですね」

崩れ落ちかけた体を剣で支えながら青年はポツリ、と漏らした。

直撃、という言葉にフェイトは彼に突き飛ばされた時のことを思い出す

あの時、彼が自分を突き飛ばしていなかったら直撃を受けていたのは間違いなくフェイトだった。

もし、あの直撃を受けていたなら……

フェイトは想像してゾツとした。

一体何の目的で自分を庇ったのか、フェイトは青年の背中を凝視する。

フェイトの視線に気付いているのかいないのかフラフラと剣を引きずりながらと歩き出す青年

その足取りから重傷だと推測

向う先には未だ倒れ臥せるスバルの姿があった。

反射的にフェイトは

「バルデッシュ！」

| s t a n d b y r e a d y !

『 s e t u p ! 』

一瞬にしてフェイトは黒いバリアジャケットとマントを身に纏う。

その右手には死神の鎌の如きデバイス、バルディッシュ

「武装を放棄して、止まりなさい！」

ピタリ、と青年の首筋にバルディッシュの刃を寸止めする。

あつと言つ間に間合いを詰められたことに驚いたのか青年は呆けた表情をしていた。

が、

「分かりました」とデバイスを待機状態に戻した。

「え・・・」

あつさりと武装を解除し、更には騎士甲冑まで解除した青年にフェイトは戸惑う。

戸惑うフェイトを余所に青年は背を向け再び歩き出そうとする。

「動かないでください！」

制止の意味を込めバルディッシュの刃をあてる。

しかし、その刃を無視するかのように青年は歩きだす。

プツリ、と切れた皮膚からは血の玉が生まれる。

「もう一度言います、動かないでください！」

スツと振り返った青年は

「あの二人はあなたにとって大切なものなのでしょう」

と突然言い出した。

「何を・・・」

「彼女等に危害を加える気はありません。もし、僕の言葉が信用ならないのであれば・・・」

―斬ってくれても構いません

躊躇いもなくそう言い切った彼の目を見てフェイトは

―真っ直ぐで綺麗な目、でも・・・

その目は一切の穢れもなく、ひたすらに真っ直ぐで、でも、どこか大事な何かが欠けていた。

善人が悪人かは分らない、でも、信用してもいい相手だと判断したフェイトはバルディッシュの刃を外す。

「応急処置しかできませんけど・・・」

とスバルのお腹の上に手をかざし、青年は深く目をつぶる。

彼の手から発せられる魔力に治癒魔法の一種かとフェイトは思ったが、それにしては魔力の消費が小さい。

それに僅かにだが指を小刻みに動かしてもいる。

「ふう・・・っ」

終わったのか溜息を吐く青年

「かはッ」

ベチャリ、とぶちまけられる血

駆け寄ろうとしたフェイトに青年は

「大丈夫です、こう見えても体は人より頑丈にできているのでね」

明らかな強がりと言うと彼はスバルと同じようにティアナにも応急処置を施した。

「僕にできるのはここまでです。あとは何とかなるでしょう」

「ありがとう」と頭を下げたフェイトに青年は一瞬目を丸くして

「・・・どういたしまして」

と微笑

それは見ていて気持ちのいい微笑であった。

「では・・・」

去っていくとするその背中に

「待ってください」

「何でしょうか？」

「私たちにも協力できることがあると思う。だから・・・」

「無理ですね」

バツサリと否定した彼は続けて

「言ったでしょう僕はあの異形と同類の化け物なんですよ」

—そんなの関係ない

と口にしうとしてフェイトは息をのんだ。

鋭い刃がその首筋に添えられていたからだ。

「僕はね、邪魔する人間なら女子供でも躊躇もなく殺せるんですよ」

酷く冷たい眼だった。

静かに刃を引いた彼は背を向けて

「あなた達は光で、僕は闇。光と闇が混じり合うことは永遠にありません」

その言葉に秘められたのは完全な拒絶

そして、と彼は続けて

「僕は化け物なんです。人を殺すことしか能のない、ね」

―では、さようなら

投げかける言葉も返す言葉もなくフェイトは闇の中へと消えていく
その背中をジッと見つめることしかできなかった。

第九話（後編）（後書き）

何か最近、アクセス数が減って来た・・・
ヤバイかもしれん、早急に手を打たないと。

やっぱり、色気がないのがいけなかったのか（コラ、マテ！

いつかはサービスシーン（ちょいエロ程度）も書く予定なので、乞
うご期待。ということなのでご意見、感想を心よりお待ちしております
ます

第十話

夕暮れ時、田舎道に小さな影が一つ。

俯き力なく歩くその影はまだ幼い子供のもの。

その体は泥だらけでむき出しになっている脚や腕にはいくつもの生傷があつた。

紅い眼に貯めた涙を零しながらも歩き続けるその子供に

「また服ドロドロにして・・・」

その声に子供は俯いていた顔を上げ、声の主を見た。

「母様―」

反射的に突進のような勢いで飛びつく子供に対し

ゲシッ

女性の足が子供の顔面を受けとめる。

顔を踏まれながらも子供は何とか抱きつこうと腕を振り回すが全く届かない。

「母様―」

その顔は足に隠されていて見えないが、生き生きとした声から、嬉

しそんな表情を浮かべていいのが読み取れた。

「母様―」

「ええい、しつこいわ」

大和撫子のような容姿からは想像も出来ぬ言葉が女性から発せられた。

「母様―」

バフッ

「あーあ、私の服までドロドロじゃない」

そう言いながらも女性は飛びついて来た子供を受けとめ優しくその頭を撫でていた。

「また虐められて、やられっぱなしのまんま逃げてきたのアンタ？」

「うん・・・」

と弱弱しく答えた子供に対し、アンタさ・・・と女性は切り出し

「拳の一発ぐらい相手に返してやんなさいよ。そうすれば相手だつて大人しくなるんだから」

続けて

「もし、それでも大人しくならなかったらもう一発顔面にぶち込ん

「じゃえばいいのよ」

子供は黙ってそれを聞いていたが

「でも・・・」

「でも？」

聞き返した女性に子供は

「殴られたら痛いよ」

その言葉に女性は一瞬呆氣にとられ、次に困ったような顔をした。

「変なところがパパに似ちゃったのね」

呆れるような仕草をしながらも女性はどこか嬉しそうだった。

「アンタのパパもね、呆れちゃうほど優しい人だったのよ」

「じゃあ弱かったの？」

と子供が訊くと

「確かに弱かったわ。でもね、強かったわ。世界中の誰よりも、ね」

誇らしげにそう語る女性

「よくわかんない」

首をかしげた子供に女性は

「今は分かんなくてもいいの、でもね、いつかは分る時が来る」

―だってね、アンタはあの人の子供なんだから・・・

そう言った女性の目は遙か遠くを見ていた。

「本当に？」

「私が嘘言ったことある？」

あるよ、と子供は即答し

「昨日だって僕のヨーグルト勝手に食べたのに知らないふりした」

「う・・・」

あからさまに目をそらし、知らんぷりを決め込む女性に

「楽しみにしてたのに・・・」

子供は恨めしそうな視線を送る。

その視線に耐えきれなくなったのか女性は顔の前で両手を合わせて

「ごめん、今度は二個買ってあげるから」

と謝った。

「やったあ！」

ひとしきり喜んだ子供は小指を突き出す。

その意図を理解した女性も小指を突き出した。

二人は互いに突き出した小指を引っ掛け

「指きりげんまん」嘘ついたら針千本のくまず、指きった！」

「夢か・・・」

マンションの一室、キョウはゆっくりと起き上がった。

「何でまた・・・」

―と、そこで頬を濡らすものに気付く

怪訝に思ったキョウは試しに頬を人差し指で拭いて見てみた。

それは色も何もない透明な液体

「涙・・・？」

久しぶりに見た自分の涙に戸惑うキョウ

―さっきの夢のせいですね・・・

さっきまで見ていた夢はまだ自分が人間であつた頃の温かな記憶の一つで、自らの手で心の奥底に封印した筈だった。

にも関わらず何故、封印した記憶は夢という形で再び現われた。

脳裏に再生されるのは金髪の女性

『私たちにも協力できることがあると思う。だから・・・』

そう言われた時、優しく温かな日の光の下に自分は戻れるかもしれない、という希望に一瞬でもキヨウの心は揺れ動いた。

―自分にはそんな資格がないと知っておきながら・・・

スッ、とキヨウは自分の両手を見る。

「無理なんですよ・・・」

その目に映るのは眼前の手

だが、キヨウに見えるのは幼い顔と小さな手を真つ赤に濡らした一人の子供

「もう僕にはそんな資格なんてない」

と手を静かに握りしめキヨウは戒めの言葉を呟く

目を閉じ、何度も何度も繰り返し、自分を戒める。

戒めの言葉に、真っ直ぐな彼女の紅い眼も、容赦なく黒く塗りつぶされていく。

迷いなんていらぬ、必要なのは憎悪とあらゆるものを擦じ伏せられるだけの暴力

その二つの前には正義や想いなども無残に踏みにじられる

それがこの世の現実

目を開いたキヨウは

「さて、体の調子も戻ってきましたし、そろそろ行動開始といきましよう」

ニヤリ、と唇の端を歪めた。

第十話（後書き）

いかかでしたしょうか第十話

そろそろコメディなところも書きたいのですが、しばらくはシリアスな話になると思います。

ご意見ご感想（クレームも受け付けます）のでどころかよろしく。

第十一話

クラナガンの東の端

高級そうな一軒家が立ち並ぶその街は主にお金持ち、俗に言うセレブ達が住んでいた。

その地区の大通り、昼下がりの空気に誘われ思い思いの時間を過ごすセレブ達

いつもどおりの日常の光景

しかし、そんな中異質な空気を放つものがあつた。

背を曲げ歩くその男は体とは不釣り合いに見えるほどの大きな荷物をしょっていた。

「いけませんね・・・この重さ。フレームを削る必要がありますねえ」

そう呟く男の顔は白い仮面に覆われていて見る事ができない。

「桐谷君に頼むべきでしたね。彼は肉体労働が得意ですから」

ブツブツと独り言をつぶやく様子は不審者その物

関わらないように、と人々が距離を取る中

一人の少年が男に近づいた。

「先生、ご報告ついでお迎えに上がりました」

「おお！ちょうどいい所に来ましたね桐谷君、この荷物が重いので桐谷君を呼んで運んでもらおうと思っていたところですよ！」

桐谷と呼ばれた少年は文句の一つも言わずその大きな荷物を受け取る。

「で、報告というのは？」

「はい、ギエル・マックフォード殺されました」

その言葉に男の目が細まる。

「誰に殺されたか正確には知りませんが、たぶん、同一人物かと」

男は困ったような表情を浮かべ

「ちゃんとお膳立てはしてあげたというのに・・・」

「特殊結界にガジェットドローン数十体、それだけのものを与えられていたにもかかわらず殺されるとは」

桐谷は続けて

「まあ、始めから分っていたことです。あの男は魔人の力を扱うには相応しくなかった、ただそれだけのことでしょ」

その目には蔑みの色があった。

「桐谷君は毒舌ですね」

「事実を言っただけです」

「そうですか。ところで『彼ら』の所在に関して何かわかったことはありますか？」

その問いに桐谷は申し訳なさそうな顔をして

「いいえ、新しい情報は何も」

「そうですか・・・」

桐谷の答えに男は残念そうな声を漏らした。

「先生、『彼ら』とはこの計画に必要な存在なのですか？」

「勿論ですよ、『彼ら』こそ私のルーツでもあり、そして、この計画のルーツでもあります。故に『彼ら』なくして計画は成就しないのです！」

熱っぽく男はそう語った。

「そうだったのですか・・・では、『彼ら』の所在の確認に関してはベリスに任せましょう。情報収集は彼女の十八番ですから」

「なるほど、それはいい考えです」

不審者と少年はその場を後にする。

二人が去って行った後、何事もなかったかのようにその大通りはいつもの風景を取り戻していた。

とある世界の朽ち果てた都市

その人気のない都市の上空を飛行する影が一つ。

「こちらアルファ1、目標を発見した！」

アルファ1の視線の先には目標、白髪の青年が背中を向けて走っていた。

―了解、非殺傷設定での攻撃を許可する

オペレータの通信に了解、と答えたアルファ1は白髪の青年に狙いを定める。

（まずは様子見に一発）

視界の中央、ビルからビルへと跳び移る青年にアルファ1は照準を合わせトリガーを引く

デバイスの先端から放たれるのは五つのスフィア

目標を追尾する力を与えられたそれは一直線に青年に向かって迫る。

対する青年は振り返り様、大剣を一閃

刀身から放たれた魔力の刃とスフィアがぶつかる。

一瞬の均衡を打ち破ったのは魔力の刃

―ッ！

とつさに張られたプロテクションに魔力の刃は進行を阻止され、砕け散るようになされた。

防御は間に合ったものの重い衝撃にアルファ1の体が吹き飛ばされた。

―逃がすか！

何とか姿勢を整えたアルファ1は再び狙いを定め発射

続けざまにトリガーを三回引いた。

飛来してきたスフィアを青年は躲そうと左にステップ

―もらった！

「―！？」

動揺を露にした青年の足首、そこには青い光の輪が巻きついていてた。

青年は足を動かそうともがく

リングバインド、バインド系の魔法の基本であり初歩だ。

その起動の速さからアルファ1はこのバインドを好んで使っていた。

「大人しく武装を放棄して投降してください」

アルファ1はデバイスの先端を青年に突きつけた。

「嫌ですね、御免こうむります」

もがくのをやめた青年はそう言って笑う。

「そうですか、なら仕方ありません」

アルファ1は青年の周りを取り囲むようにスフィアを展開

こうなつては魔力の刃で撃ち落とすのも不可能だろう。

両腕以外身動きが取れなくなった青年にアルファ1は狙いを定め

発射

―と、

「詰めが甘いですね」

突然、青年が大剣を振り下ろす

突き刺すように振り下ろされた先にあるのは青年の足もと、ビルの屋上だ。

—まさか！

アルファ１が想像を結ぶより先に刀身がコンクリートに深々と突き刺さり

「では、さようならです」

青年が魔力を刀身から放つ

放たれた魔力がコンクリートの中を瞬く間に迸り

破碎

一瞬にしてコンクリートの屋上が崩落、それに吞まれながら闇に消えていく青年の姿をアルファ１は呆然と見ていた。

放たれたスフィアが静かに虚空を薙いでいた

時空間に佇む巨大な船

その船の中央管制室にある大型のディスプレイ、そこに映るのは崩落するビルの屋上

その映像を注意深く見詰める者の中にゲンヤ・ナカジマはいた。

「目標をロスト、転移を確認しました」

と無念そうに報告するオペレータに

「仕方ないよ、私やてあんな手で逃げられるなんて予想もつかんだわ」

慰めるようにそう言ったのは八神・はやて

「確かに私も同じような状況だったら逃げられてたと思う」

続くように言ったのは高町・なのはだ。

「しかし、馬鹿な野郎だな。あの崩落に巻き込まれたら死ななくても大怪我だぞ」

艦長の席に座った若い男がそう漏らす。

人を食ったような顔をしたその男の名は、ダウケ・ベルガー

自称、世界で二番目にやる気のない男、今は次元航行艦『黒獅子』艦長代理を務めている

「いや、あの顔は全部計算してる顔だ」

「崩落の際のダメージも、か？」

「ああ」

それにしても、となのはが唐突に切り出す

「あの子の使ってた魔法って古代ベルカ式に似てたよね」

「うん」

怪我も完全に治りきったフェイトが頷く

「全くなんて野郎だ・・・」

うんざり、と呟くベルガー

その訳は二重、三重の包囲網を敷いたにもかかわらず全く目標を見つけることもできず、やっと補足したかと思ったらあのような非常識な手段で目標に逃げられた、ことではなく

「さっさと家に帰りたいのに、これでは早く帰れないじゃないか」

という実にやる気を疑いたくなるような個人的な願望だった。

――駄目だコイツ・・・早く何とかしないと

ベルガーを除く四人は思わず頭を抱えた。

何とか気持ちを切り替えたゲンヤは

「はやて、何で俺たちを呼んだのか聞かせてもらおうか」

「そうやね。ちゃんと彼の顔を見てもらったし」

とはやては立ち上がり紙の束を配っていく。

―これは・・・！

表紙を飾る文字を見てゲンヤ、なのは、フェイトは息をのむ

その表紙には

―新機動六課

の文字があつた

第十一話（後書き）

一週間ほど作者の都合により更新が止まります。

楽しみにしてくださってる方（いるの？

申し訳ありませんが一週間ほど我慢してください。

意見、感想、リクエストも受け付けておりますのでどうか評価の方
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6343h/>

魔法少女リリカルなのは 漆黒の狂剣士

2010年10月19日14時42分発行